神社名：装束稲荷神社　　しょうぞくいなりじんじゃ

住　所：北区王子2-34－14

調査月日：２０２０年２月１日

調査参加者：粟田、神川、河辺、有田、木村、梅田、宮崎、小幡、浅見、竹内、小林、木村（怜）
定本

写　真：

由来など：　今から約千年の昔この附近一帯は野原や田畑ばかりでその中に榎の大木があり、そこに社を建てて王子稲荷神社の摂社として祭られたのがこの装束稲荷であります。

この社名の興りとして今に伝えられるところによれば毎年十二月の晦日の夜関東八ヶ国の稲荷のお使いがこの村に集まりここで装束を整えて関東総司の王子稲荷神社にお参りするのが例になっていて当時の農民はその行列の時に燃える狐火の多少によって翌年の作物の豊凶を占ったと語り伝えられています。江戸時代の画聖安藤広重がその装束稲荷を浮世絵として残しています。

昭和 20 年 4 月 13 日の大空襲の際猛烈な勢いで東南より延焼して来た火災をここで完全に食い止めて西北一帯の住民を火難から救った事は有名な事実です。この霊験あらたかな社が余りにも粗末であったので社殿を造営せんものご地元有志の発起により多数の信者各位の御協力を得て現在の社伝を見え至りました。

この装束稲荷は商売繁昌の守護神のみならず信心篤き者は衣装に不自由することなく、又火防の神としても前に述べた通りで信者の尊栄を高めています。

昭和 29 年 12 月吉日　装束稲荷神社奉賛会（境内掲示より）

「王子の狐火と装束榎」

かつてこの辺りは一面の田畑で、その中に榎の木がそびえていました。毎年大晦日の夜、関東各地から集まってきた狐たちがこの榎の下で衣装を改めて王子稲荷神社に参詣したといういいつたえがあることから、木は装束榎と呼ばれていました。狐たちがともす狐火によって、地元の人々は翌年の田畑の豊凶を占ったそうです。

江戸の人々は、商売繁昌の神様として稲荷を厚く信仰しており、王子稲荷神社への参詣も盛んになっていました。やがて、王子稲荷神社の名とともに王子の狐火と装束榎のいいつたえも広く知られるようになり、左の広重が描いた絵のように錦絵の題材にもなりました。

昭和 4 年（1929）、装束榎は道路拡張に際して切り倒され、装束榎の碑が現在地に移されました。後にこの榎を記念して装束稲荷神社が設けられました。平成 5 年（1993）からは、王子の狐火の話を再現しようと、地元の人々によって、王子「狐の行列」が始められました。毎年大晦日から元日にかけての深夜に、狐のお面をかぶった裃姿の人々が、装束稲荷から王子稲荷神社までの道のりをお囃子と一緒に練り歩く光景が繰り広げられます。　（北区教育委員会掲示より）

祭神など：宇迦之御魂神

空間位置・面積等・植生など：街中にあり、境内は狭い。大晦日の「狐の行列」の集合出発地である。伝えある榎木は二代目で胸高直径３０ｃｍぐらいに成長しているが、あとはわずかな庭木があるのみで社叢といえる樹林はほとんどない。

地図上の位置：

平面図：調査せず